

## 「第21回国際言語学会議」報告

梶 茂 樹

京都産業大学／京都大学名誉教授

ポーランドのポズナン市で開催された第21回国際言語学会議（以下 ICL: International Congress of Linguists）に出席してきた。開催期間は2024年9月8日（日）から14日（土）までの7日間であった。ICLというのは国際常設言語学者委員会（以下 CIPL: Comité International Permanent des Linguistes）が5年に1度 CIPL 加盟国の持ち回りで開催している世界規模の言語学会である。前回第20回大会は2018年に南アフリカのケープタウンで開催され私も参加した。5年後の第21回大会は、実は2023年にロシアのカザンで開催することが決まっていたのであるが、ウクライナ紛争の煽りを受け開催を1年延期し、また開催地もポーランドのポズナンに変更しての開催となった。私は前回に引き続きこの会議に日本言語学会代表として出席した。今回の出席には日本学術会議から旅費の補助を得た。この場をお借りして日本学術会議並びに、旅費の推薦をしてくださった日本言語学会の石井透前事務局長、定延利之現会長（日本学術会議第1部会員）その他関係者にお礼を申し上げる。

日本からはポーランド航空が成田からワルシャワまで飛んでいるが、私が住んでいる京都からは成田まで行って乗るのも、関空からドバイまで飛んでそこからワルシャワまで行くのも手間は変わらないので後者を選択した。飛行機は関空を予定通り9月6日夜に立ち翌7日にワルシャワに着き、そこで1泊し翌9月8日朝に列車でポズナンまで移動した。ワルシャワから乗ったのはドイツ国鉄のインターシティ特急（ベルリン中央駅行）であった。ポズナン市はポーランド西部に位置し、ワルシャワからよりもベルリンからの方が近いという位置関係にある。ただ乗った列車の出発が30分遅れ、またポズナン駅から投宿のホテルまでの移動があったため、大会会場へは予定より少し遅れて到着したが、無事参加登録を完了した。前回ケープタウンでの開催時はガラ・ディナーなどイベントにも参加したが、今回は参加は見合わせた。それでも大会参加費は2118.11ズウォティ（約78000円）と高額であった。

今大会のホスト大学はアダム・ミツケヴィチ大学であった。

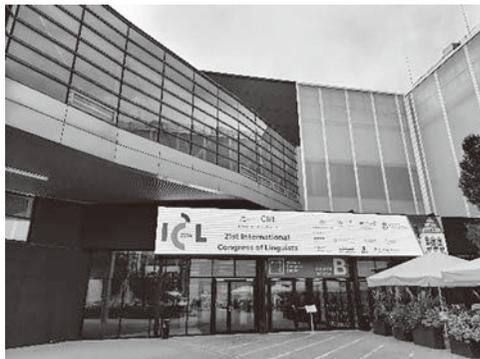


写真1 ICLが開催されたポズナン会議センター

しかし大会会場は大学ではなくポズナン会議センター (Poznań Congress Center) であった (大会参加費が高いのはこの会議センターを借りたせいであろう)。ポズナン中央駅のすぐ西に位置する近代的な立派な建物であった。発表会場は整然と並んでおり 12 会場に別れて (ポスター会場は 1 階ロビー)、音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、歴史言語学など伝統的研究分野のみならず幼児言語、多言語使用、危機言語、手話言語など多様なテーマの研究発表が行われた。また毎日、原則午前と午後のセッションの前に全体講演が設定されていた。

今回の会議の特色として、ポーランドに因みエスペラントのセッションがあったり、ウクライナ語の社会言語学的状況に関する全体講演があったことが挙げられる。また近年、移民や難民問題が世界の様々な地域で発生し、その移住先における言語の問題が生じているが、その言語問題を取り上げたり、また性差、年齢差、身体的障害のあるなしなどにかかわらず全ての人を包み込む用語として英語の inclusive ということが言語学でも言われるようになってきたが、このテーマに関するワークショップが開かれたのも特徴であった。また近年は AI 技術も進み言語研究にも影響が出てくるようになった。生成文法学者による全体講演の中に、Is ChatGPT a grammatically competent informant? という問いがあった。言語は規則で成り立っているというのが生成文法学者の言い分だが、ChatGPT は規則ではなく生成された文の集まりから物考えるので現時点では grammatically competent informant たりえないが、将来はどうなるか分からない。私は発表はこれら以外にも、中国四川省の言語接触の問題、ウクライナ語の有声摩擦音の問題、ロシアに話されるウラル系の Mansi 語の社会言語学的状況の発表などを聞いた。全体としてはよくオーガナイズされた大会であるという印象を持った。

今回日本人参加者は多く、岸本秀樹 (神戸大学)、後藤亘 (東洋大学)、石井透 (明



写真 2 ICL の発表会場 1



写真 3 ICL の発表会場 2

治大学), 守屋哲治 (金沢大学), 漆原朗子 (北九州市立大学), 中安美奈子 (浜松医科大学), 田辺和子 (日本女子大学), 松浦年男 (北星学園大学), 江口清子 (大阪大学) などが参加し, また発表を行った。中堅, シニアの研究者のみならず若手研究者の参加が目立ったのも特徴であった。CIPL は若手研究者に旅費の補助をしている。申請して通る必要があるが, この案内は日本語学会のホームページにも掲載している CIPL ニュースレターに書かれている。もし知らない人がいたら是非見て参考にして欲しい。なお今回の会議全体の参加者 (大会登録者数) は 73 か国 657 人ということであった。

私の大会参加は, 大会発表を聞くことが主目的ではなく, CIPL の総会 (general assembly meeting) への参加であった。総会は最終日の 9 月 14 日朝に開催され, テーマは以下の 12 であった。CIPL の総会会場は大会発表会場ではなく, 少し離れた Collegium Heliodori Świącicki というところであった。この建物はネオ・ルネッサンス様式の由緒ある建物で当初ボズナン工科大学のためにということで建築が予定されたらしいが, 紆余曲折を経て現在はアダム・ミツケヴィチ大学の所有物となり, 主として文科系の様々な研究施設が入っている。

- 1) 開会式
- 2) 2018 年 7 月 6 日にケープタウンで行われた総会の議事録確認
- 3) 現 CIPL メンバーシップ
- 4) 言語学 bibliography の出版報告
- 5) ユネスコの危機言語問題
- 6) ニュースレター
- 7) 若手研究者への旅費補助
- 8) 次回 ICL 開催地
- 9) 現規則の確認
- 10) 2024–2028 年の執行部選挙
- 11) その他
- 12) 閉会式

2) の議事録に関しては特に問題はなかった。3) の CIPL メンバーシップに関してはアルバニア言語学会が新たにメンバーに加わったことが報告された。4) の言語学 bibliography に関しては印刷物の出版を減らし段々とオンライン出版に切り替えつつあることが報告された。5) について。



写真 4 CIPL の総会会場アダム・ミツケヴィチ大学の Collegium Heliodori Świącicki

CIPL はユネスコと危機言語問題に関してタイアップしているが、2024 年の CIPL 危機言語賞はオーストラリア・アデレード大学の Robert Amery 教授に決まったことが報告された。そしてオンラインで Amery 教授が登場し受賞の喜びを語ると同時に自らの活動について報告を行った。Amery 教授が係わってきたアデレードの Kaurana 語は 1960 年代にすでに日常生活では用いられなくなっていたが、Amery 教授らの積極的な再生取り組みにより現在では様々な状況で用いられるようになったということである。今回の受賞はその活動が評価されたものである。6) のニュースレターに関しては CIPL の活動を CIPL 加盟の各国言語学会に積極的に開示し、また各国言語学会の活動を知らしめるためニュースレターに情報を提供してほしいということであった。7) 若手研究者への旅費補助に関しては今回の大会参加のため 6 名に旅費補助をしたということである。8) の次回 ICL 2028 年大会の開催地についてはオランダのライデン大学とブラジルのマセイウ (Maceió) が名乗りを挙げているということが事務局長の Frieda Steurs 氏から報告があった。ライデン大学というのは Steurs 氏の勤務先であり、ビデオによる紹介映像があったが、マセイウに関しては Steurs 氏からそういう口頭の報告があっただけで詳細説明はなかった。ブラジルの関係者は会議に来ていなかった。インターネットで調べるとマセイウ大学というのはないので Universidade Federal de Alagoas のことであろう。

今回の CIPL 総会の最大の議題は、10) の 2024–2028 年の執行部選挙であった。執行部というのは会長 1 名、副会長 1 名 (あるいは 2 名)、及び理事のことである。事務局長 Frieda Steurs 氏 (ライデン大学) は 1 期務め、今回は留任である。執行部の任期はいずれも 5 年で会長、副会長は連続 2 期まで、理事は再選可とあるだけで、何期までという規定はない。現会長はオーストラリアの David Bradly 氏であるが 2 期務めたためお役御免となり、選挙の結果、やはりオーストラリアの Anne Pauwels 氏 (メルボルン大学) が新会長に選出された。副会長はカナダの Frederic J. Newmeyer 氏 (ビクトリア大学) となった。そして理事であるが、今回の ICL 大会の責任者であったポーランドの Katarzyna Dziubalska-Kořaczyk 氏 (アダム・ミツケヴィチ大学) のほかに 6 名が選出され、私もその内の 1 人であった。

これは少し考えないといけない問題である。私は田窪行則氏のあと 5 年 (ICL 大会が 1 年のびたため正確には 6 年) 日本言語学会代表として CIPL 委員を務めており、今回の大会を期に CIPL 委員を辞めるつもりでいた。しかし CIPL 理事となったため次期 ICL 大会に向けて役割をすでに割振られており、それを無視して辞めるのも問題かと思う。同じ問題が田窪氏の場合も生じ、田窪氏も理事となったため CIPL 委員を結局 10 年間務めることとなった。私もあと 4 年務めざるをえないようである。11) その他は特に議題はなく、午前 10 時から始まった会議は予定通り 12 時に終わった。

アダム・ミツケヴィチ大学のあるポズナン市はポーランド最初の王朝ピヤスト朝が興った場所であり、南部のクラコフとともに、日本で言えば奈良や京都のような都市である。ポズナン市は街のサイズも大きくなく歩いて回れる範囲に様々

な歴史的記念物が存在する。また今回お世話になったアダム・ミツキェヴィチ大学というポーランドでも由緒ある大学の所在地でもあり、学問と学生の街でもある。そして街中に路面電車の路線が張り巡らされており、これを使えばより効率よく街中を移動することができる。私は1週間滞在するというので7日間有効のチケットを買った。25ズウォチ(約920円)であった(購入後に知ったことであるが大会の名札があれば無料で自由に乘れるということであった)。

ポーランドはウクライナの西隣であり、NATOのウクライナ支援の最前線基地であるため戦争の影響があるかなと思っていたが、研究の発表テーマはともかく、実生活ではそういう気配は少なくとも表面上は全く感じることはなかった。ただ飛行機は慎重にウクライナの上空を避けているようであった。

会議のあった9月の中旬は、中部・東部ヨーロッパは洪水に見舞われ南部のクラコフやチェコなどでは大変な事態となっていたようであるが、幸いポズナンは洪水とは無関係であった。それでも小雨交じりの天気で日中でも気温は10数度と低く、長袖シャツ1枚では寒い程であった。しかし帰路、関空に降り立ち建物の外に1歩出た途端、ムッとする湿気に纏りつかれ、一気に現実世界へ舞い戻った。



写真5 ポズナン市を走る路面電車